

第二言語話者のアイデンティティ実践について

— 「学び」を中心にしたアイデンティティ構築 —

ドリュー・スペイン (筑波大学大学院生)

研究背景

アイデンティティ研究におけるL2話者の見直し

従来	Firth&Wagner(1997)など以来
母語話者と比較して「不完全」な話者	自立した話者
常に「L2話者」として会話に参加する	言語能力・知識の不足が可視化された時のみ志向される
しかし「L1-L2」という参加者の構成によりL2話者がL1話者に比べて能力を欠けた者であるという先入観をより局地的なレベルで再生産しているのでは？	

研究目的

複数の日本語L2話者の参与が見られた相互行為のデータをケーススタディーとして扱い、彼らがどのようにして自分のL2話者としてのアイデンティティを構築するかを明らかにすること

データ及び方法

日本語L2話者 4名 (A(2), B(2), C(2), D(2))
 日本語L1話者 2名 (E(1), F(1))
 シェアハウスで行われたゲーム会の録画・録音
 会話分析と成員カテゴリー化分析を統合した sequential categorization analysis (Bushnell 2014)

分析：「片手」というその場で習得した日本語がL2話者のアイデンティティ構築の資源として用いられた過程

【断片1】 ((41:40))

01 A(2): なんていう. (in) one hand
 02 B(2): o[ne handは(.)なに?(.)ってなに
 03 C(2): [片手.]

→ C(2)が「片手」という語彙をA(2)、B(2)、D(2)に教える

【断片2】 ((1:20:13))

01 E(1): え:::受け取れない:::
 02 (2.0)
 a(2) +E(1)の右手をタワーから離れるように押す
 03 A(2): **片+[手]**
 04 D(2): [•hehehe• ((C(2)、D(2)笑顔))
 05 E(1): あっかた-HA[HAA
 06 A(2): [hahaha
 07 E(1): すごい:-
 a(2) **+C(2)、そしてD(2)に向けて指鉄砲というジェスチャーをする**
 c(2) **+A(2)にジェスチャーを返す**
 08 A(2): **[+ayy[:::[:+↑[:::: hahaHAHA**
 09 E(1): [敵 [しいん[だよ [これ.
 10 D(2): [haha [ha [I
 11 C(2): **[nice.[**

新しく習得した語彙をルール違反に対する指摘で用いる

・共有されている暗黙の理解への言及
 ・「成功」を指標する

「片手」という新しい語彙が使えたことに対する評価

考察

「片手」

→ 指鉄砲及び英語を用いた評価により普段使っている日本語と区別された「学んだ語彙」、そしてL2話者の仲間であることを表出することば

「L2の言葉を学ぶ」活動をする「L2話者」としてのアイデンティティの再構築



A(2)のC(2)に対する指鉄砲 C(2)からA(2)への返し

結論

学びという知識の蓄積を中心とした積極的なL2話者のアイデンティティ構築の可能性を示した

従来の研究がこれまで「L2話者」のアイデンティティを「L1話者」との対の一方だけとして捉えてしまい、「L1話者」から独立したアイデンティティとして構築されないという前提で研究を進めてきたため、多様な実践は見逃されてきたということを指摘した